
VS

春のん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VS

【Nコード】

N1138U

【作者名】

春のん

【あらすじ】

果てしなく続く悪魔と人間の戦い。

だが悪魔とは人間の手によって作られた破壊兵器の失敗作であった。

人類の失敗作が人類を絶滅の危機にさらしているこの時代で、
1つのギルドが動き出す・・・

一般学生が描く、

コメディー？ 恋愛？ シリアス？ SF？

ジャンル不特定の小説です
ちなみに第一章はコメディです。

0話 始まり (前書き)

序章

0話 始まり

20XX年

世界中の各地で紛争が起こり
アメリカやイギリスを中心に全面戦争を行った事が原因で
人間は絶滅の危機にさらされた。

きっかけは
領土が欲しいと言う単純な欲だった。

その中で勝つことだけを狙っていたある国のプロジェクトが
戦死した兵士等を集め、その死体の遺伝子を変えて、
破壊兵器と呼ばれる新たな人類を造り上げていった。

しかし研究には失敗がつき物で
遺伝子を変えて造られた人類の一部が暴走を始め、
ついには人類とは程遠い何か違う得体の知れない“生物”となった。

その生物は不幸にも繁殖力が極めて強く、
さらに人を食とし、
世界中にその生物は広がっていった。

そのお陰で人類は絶滅したと言ってはおかしくない程減少し、残された数少ない人々は地中に施設を建て、そこでひっそりと息の根を立てていた。

それから何十年と時が過ぎ、世界中に広がったその生物はいつの間にか“悪魔”と呼ばれるようになっていた。

そう、悪魔とは人の手によって造り出された破壊兵器の失敗作なのである。

その中でその”悪魔”とよぶ生物を狩るという“悪魔討伐専門裏政府組織”と言う組織が作られた。

そしてこの話は
その悪魔討伐専門裏政府組織の中に居た人たちの出来事を描いたものである。

0話 始まり (後書き)

この話は全体的に見ていくと最終的には近未来SFになっていくと思います。

話の一部でコメディ・恋愛・シリアス等といった要素が含まれるという事を

あらかじめご了承して頂く様お願い致します。

注意

・特に記載のない場合、

掲載されている小説はすべてフィクションであり

実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

・特に記載のない場合、

掲載されている小説の著作権は作者にあります(一部作品除く)

・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。

ご自由にリンク(紹介)してください。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。

目次

登場人物（前書き）

登場人物の主な設定等

登場人物

S - 001号

(17歳)

男

性格：決して良いとは言えない

比較的気が短く動物にもマジギレする事がよくある

人一倍負けず嫌いでは・・・ない

面倒な事が大嫌い

他：自分の名前を覚えていないが

皆からヤスと呼ばれている。

Sランクのリーダー

S - 002号

(17歳)

男

関係：S - 001号の双子の弟

性格：おとなしい

天然で何を考えているのか分からない時がある

喋り方は兄にやや似ている

他：兄と同様で名前を覚えていない為
皆からはヤシと呼ばれている。
兄を頼りにしている

S - 003号

(16歳)

男

関係：Sランクの後輩

性格：どこか幼く

一言で表すならば馬鹿の類に入る

他：ヒーローが大好き

よくエロビデを見ている姿を目撃される

S - 004号

(16歳)

女

関係：Sランクの後輩

性格：面倒見が良く、しっかりしていて
物事を的確にこなす事が出来る

他・S・003号と同期で

ぬいぐるみが大好きらしい

登場人物（後書き）

登場人物：後に増えます。
絶対に増えますすみません。

1話・0 昨日の悲劇なんて言っている場合じゃない!! (前書き)

第一章

1話・0 昨日の悲劇なんて言っている場合じゃない!!

俺のコードネームはS・001号
名前なんてものはとっくの前に忘れた。

コードネームがS・001号という訳であってロボットと言つ訳ではないが、
ごく普通の人間とも言いにくい。

だからといって俺は人造人間という訳でもない。

体内の器官だつてちゃんとあるし見た目も人間そのものだ。

だが、皆は俺たちの事を【人間】ではなく【破壊兵器】と呼ぶ。

S・001号の意味はSランクの001号、すなわち俺はSランクのリーダーである。

俺はSランクのリーダーだ、とストレートに言われても意味が分からないのも無理はない。

Sと言うのはランクの事を意味示していて
俺はSランクだが、他にもA・B・Cランクが存在している。

001と言うのはランク中の順位であり

001(俺)はリーダー、

002は副リーダー、

003は通信使、
004、005、006、はそれぞれの代表兵士・・・というよ
うな感じだ。

ちなみに001〜004までは特殊部隊として扱われている。

例を挙げるのならば、

俺には双子の弟がいてコードネームはS-002号で、
Sランクの副リーダーと言えば
大体どのような感じなのかは分かるだろう。

ここの施設の名前・・・と言うより、
この団体組織の名前は“Dark Wolf”と言った方が的
確だろう。

ここの施設内では毎日仲間が悪魔に喰われたり
原因不明の失踪などによって居なくなったりして減る事もあるが、

新しいメンバーが入ってきたり

ここでは孤児院的な施設も経営しているので
親の居ない子供達がやって来たりして増える事もある。

まれに孤児院からメンバーになる事もある。

喰われるか、喰われないか、

そんな恐ろしく過酷な状況の中でも
俺達は毎日楽しく過ごしている。

ではその昨日の出来事を
少しだけ紹介しよう。

1話・0 昨日の悲劇なんて言っている場合じゃない!! (後書き)

記念すべき第一話です。

注意

- ・特に記載のない場合、
掲載されている小説はすべてフィクションであり
実在の人物・団体等とは一切関係ありません。
- ・特に記載のない場合、
掲載されている小説の著作権は作者にあります(一部作品除く)
- ・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、
行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。

ご自由にリンク(紹介)してください。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。

目安にして下さい。

1話 - 1

俺はヤシと一緒にいつもの如く

悪魔の討伐をする為に隣の廃工場へ行った時の事だが、

あの辺りは特に悪魔の巣になっているらしく

廃工場へ一步踏み入れた瞬間に

物凄く強そうなヤツが出てきた時、

俺は作戦を練る為に一旦退避しようとしたが、

・・・アイツ、何をしていたと思う？

たまたま通りかかった猫とじゃれていたんだぞ？！

あり得ないだろ！！

たまたまここを通りかかった猫もおかしいが・・・

ヤシもそれ以上におかしくないか？

そんな事をしていたから悪魔に狙われた。

だがな？！

今にも襲われそうになっていたアイツは何をしていたと思う？

一応俺たちは悪魔討伐用の武器を持参していて

弟は無駄にでかいチェーンソーを使っているんだが、

・・・チェーンソーの刃に服が引っ掛かった上に

服の摩擦で刃が動かなくなっていて

それを必死に抜いていたんだぞ？！

これには自分自身も驚いたが
それ以上に悪魔も驚いて襲って良いのか悪いのか
わからない様な顔をしていた気がする。

これにはちゃんとした理由がある。

だって、

一瞬だが動作を止めていたんだぞ?!

それでも攻撃してきやがった。

当たり前か。

1話 - 1 (後書き)

読んで頂きありがとうございます！
嬉しい限りです。

この小説は会話よりも
ヤス主人公の心境が9割程度含まれています・・・

まだ下手糞ですが
これからはまともに書いて行ける様
になっていけたらいいなあと思っています。

頑張ります！！

注意

- ・特に記載のない場合、
掲載されている小説はすべてフィクションであり
実在の人物・団体等とは一切関係ありません。
- ・特に記載のない場合、
掲載されている小説の著作権は作者にあります（一部作品除く）
- ・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、
行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。

ご自由にリンク（紹介）してください。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。

目安にして下さい。

1話 - 2

弟の正面を悪魔が狙った訳だから
たぶん無傷じゃ済まないとはおもうが、

悪魔の振り下ろした馬鹿デカイ拳のお陰で
地面の一部が飛び交って何も見えなくなっただんだ。

ヤシは俺の弟だし、

さすがに死んでもらっても困るから

その視界の悪い所の中に入って

ヤシを助けに行ったら、

中でヤシが見えたから

急いでその中から引つ張り出して様子を見たら

服が血まみれになる程

腹に大きな傷が出来ていて、

「に、兄さん・・・腹痛い」

と一言だけ言うと気を失った。

え？

(腹痛い)???

昨日何か腐った物でも食べたのか？

それとも俺を馬鹿にしているのか？

・・・それ位状況を見れば分かりますけど?!

「ヤシ〜？」

ヤシの顔の前で手をかざしてみたが
全く動く気配が無かった。

痛かったんだらうなー…

ん、まてよ？

今弟は見ての通り気絶している。

この悪魔討伐って誰と来た？

弟と、

悪魔・・・は違うな。

段々頭の中で今の出来事が整理出来たぞ。

つまり、

弟が気絶したという事は

俺一人で討伐しなければならぬということになる。

え？

「ええっ!？」

無理だろ！

いや、無理だよ！

それ以上に面倒臭い!!

やめよう、やめよう。

これじゃあ俺が死ぬ事のオチが見え隠れする。
てか、オチ丸見えだよ!!

1話目で主人公が死んでどうする!!

弟は愚か

俺まで死んだら・・・

あ、弟はまだ死んでいなんだっけ。

俺もまだ死んでないけど。

そんな事どうでも良いだろ!

そうだリタイアしよう!!

その手があった!!

討伐リタイアしてさっさと弟の怪我を診てもらおう。

もうそれでいい!!

「どつにでもなれー!!」

俺は事情を説明したあと、

面倒臭いのを理由にして討伐をリタイアした。

ここまでが昨日の出来事になる。

1話・2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

これで1話目は完結です。

注意

- ・特に記載のない場合、掲載されている小説はすべてフィクションであり、実在の人物・団体等とは一切関係ありません。
- ・特に記載のない場合、掲載されている小説の著作権は作者にあります（一部作品除く）
- ・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。
ご自由にリンク（紹介）してください。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。

目安にして下さい。

私が書く小説の1話は微妙に長い為
今回のように分けて投稿したいと思っています。

これからもよろしくお願い致します。

2話 - 1 栄養失調なんて言っている場合じゃない！！

弟の治療が終わったという話を聞いた俺は、
様子を見に行くために医務室に向かっている途中だった。

俺は家族という人間の集まりが何なのか分からない。

確かに俺には弟のヤシが居るが、
生まれてから一回も親の顔を見たことが無い。

せめて死ぬまでには一回は見たい。

見られるかどうかなんて俺に分かる訳も無いが、
俺はとりあえず毎日そう願っている。

決して神を信じているわけではないが……。

だから、俺にとってこの【Dark Wolf】は親であり、
そこに居る皆は俺の家族の様なものだ。

丁度医務室に着いたので、

俺は弟の様子を見る為に医務室の中に入った。

医務室の中は思った以上に静まっていた、
それが逆に恐ろしさを演出していた。

それと同時に俺は良からぬ事を考えてしまった。

別にエロイ事を考えた訳ではない。

ただ単に・・・

弟は死んでいないのだろうか。

と、一瞬思ってしまった。

一歩ずつ歩くたびに足音が響く医務室の中を
俺は奥へ奥へと進んでいった。

歩いていくうちにヤシの姿が徐々に見えてきたので、
ヤシのいる所まで一気に走った。

ヤシの傍に行った時、
ヤシはベッドの上で整った寝息を立て、
点滴をされながらであるが寝ていたので、
俺は安心した。

「お、おーい」

俺はヤシの顔の上で手をかざしたり
頬を指で軽くつついたり

その他にも色々な事をしたが反応はなかった。

それだけ酷い怪我だったのか・・・。

まあいいか、

今はそつとしておいた方が良さそうだな。

すると、奥の方から女医が出て来た。

俺と女医の目が合った後、

女医は俺の後ろで寝ていたヤシを見詰め、
怪しげな目をしながら俺に話し掛けて来た。

「何をしていたのですか？」

「え、別に何もしてねーよ」

「何を言っているのですか、綺麗にした筈の弟の頬にいかにも指で触った跡があるのですが」

「何で分かった？」

「何でと言われても頬に泥がついているのですが」

「あ・・・マジかよ」

俺は目にも留まらぬ速さで

弟の頬に付いていた泥を拭き取った後、

女医の方を見て苦笑いをした。

「・・・で、あなたは一体S・002号に何をしていたんですか？」

「弟を起こそうかなーみたいな」

「ほう、気絶しているS・002号を起こそうと・・・」

「え？」

嘘だろ、

こいつ気絶していたのかよ。

嗚呼、成る程。

と、いうことは

整った寝息と言うのはヤシがあまりにも静かにしていたから

勝手に俺が頭の中で寝ていると勘違いをしていたのか。

2話 - 1 栄養失調なんて言っている場合じゃない!! (後書き)

読んで頂いた事を嬉しく思います。

2話目に突入する事が出来ました。

今は原稿がたくさんある為

小説が軽いパソコンの様にサクサクと進んで行くのですが、
原稿が詰まってきたら確実に遅くなっていくと思います。

でも頑張ります!!

注意

・特に記載のない場合、

掲載されている小説はすべてフィクションであり

実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

・特に記載のない場合、

掲載されている小説の著作権は作者にあります(一部作品除く)

・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、
行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。

ご自由にリンク(紹介)してください。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。

目安として下さい。

2話 - 2

何だかあまりにも失態が多すぎて腹が立ってきた俺は

「う、うるせーな！・・・で、弟は大丈夫なのか？」

腹いせに五月蠅いと顔を赤く染めながら言った後、
ヤシの状況を聞いてみた。

すると、女医は診察表を見た後、

「ええ、大丈夫です。S-002号はただの栄養失調ですから」

と診察表で顔を隠しながら静かに笑っていた。

・・・ん？

今、栄養失調って言わなかったか？

「ちょっと待て、もう一度言ってくれ」

「別に構いませんが・・・S-002号は栄養失調です」

この女医は本気で言っているのか？

じゃあ腹の怪我は一体何なんだ。

ケチャップか？

俺の心の中で

後悔と絶望が込み上げてきた。

あの討伐依頼の報酬金、すごく良かったのに。

弟が死にそうで

討伐依頼を諦めたのならまだ良いかもしれない。

まさか栄養失調で

あんなに報酬金が凄かった討伐依頼を諦めていたなんて……。

考えているだけでも涙が出て来た。

色々な意味で。

「コイツ（弟）栄養失調なの?!」

「ええ」

「じゃあ腹の怪我は?!あんなに血みどろだったのに?!」

「腹の傷?・・・ああ、あの事ね」

女医がそう言うと

奥の方から大きめのダンボール箱を持ってきて

箱の中に入れていたものをひょいとおまみ出すと

静かに笑いながら

「これが原因です」

と言った。

医者が手に持っていたのは

「あ、あの時の猫?!」

だった。

そう、まさにその猫は

弟が気を失う前にじやれていた猫そのものだった。

俺はその猫を女医から渡してもらい
見つめていると、

何が気に食わなかったのか

鳴き声を上げるなり

俺の顔を勢いよく引っ掻いてきた。

「ッ！・・・この猫、今日の晩飯の主食にしようか」

俺は猫を抱きかかえていた手を首に変え、
強く握り締めた。

これにはさすがに猫も何かを悟ったかのように
苦しそうに泣きわめいた。

これを見た女医も慌てて診察表をベッドの上に置き、
やめなさい、と言いながら俺から猫を取り上げようとした。

「やめろよ！・・・こいつ俺の顔を引っ掻いてきやがった。
その代償は勿論その小さい命で払うんだよなあ？」

俺は気持ち悪い程の満面の笑みで猫を見つめた。

・・・殺意を込めて。

「止めなさい！それは無意味な行動よ?!」

女医が必死で俺が猫を絞め殺そうとしているのを
必死で止めようとしていた。

まあ、確かに俺が猫を殺したところで
何も得することなんて無いという事位しっている。

単純に弟に対する怒りと

猫に顔を引つ搔かれたことに対しての怒りを

目の前の小動物に八つ当たりをしているだけなのである。

だが正直なところ腹が減っているのは確かだ。

「無意味な事位分かっているさ！

でも【腹が減っては戦はできぬ】って言うじゃないか！

だから俺はそういう意味でもこの猫を主食に・・・」

「いけませんって何度言えば分かるのですか！」

「だから俺はとりあえず腹が減っているんだ！だから食べる！」

嗚呼、何を言っているのだろうか、俺。

もう関係ないよな、腹が減ったから猫を食べる！とか

馬鹿だな、糞だな、カスだな、うん。

話が斜め63。位それている。

・・・それにしてもこの猫は何なんだ。

俺が首を絞めているのにも関わらず潤った目を

俺の顔に向けている。

そして何よりも苦しそうに見えないのだ。

凄くタフだなあ、この猫。

世の中まだまだ捨てたモンじゃないな。

関係無いけど。

「早くその手を離しなさい！猫が苦しそうにしているじゃない！！！」

「はぁ？何言ってるんだ。この猫は全然苦しそうになんか・・・うお？！」

ま、眩しい！！

この猫は一体何なんだ？畜生。

可愛い目をして見て来るではないか！

流し目を超える眼力だ。

今のお前、最高に輝いているぞ。

色々な意味で。

だがな、俺はそんなにも優しい人間じゃない。

俺にだってプライドのプの字位あるわ！

黙って引き下がるわけにはいかない。

俺は眉間にシワを寄せ、

猫の目を思い切り見詰め返してから物申した。

俺と猫との壮絶な戦いの開始だ。

「お、お前なんか可愛く無いぞ！！！」

「・・・可愛くないぞ！畜生ツ！！！！！」

開始後約10秒、俺は猫に負けた。

そう、猫の眼力に俺は負けたのだ。約10秒で。は、恥ずかしい。

俺は負けを認めた瞬間に手を離れたのだ。

いや、だって猫が離せって言うし？

いや、喋って無いけど見てくるし？

いや、別に悔しい訳じゃないし？

確かに猫は俺が手を離れた瞬間に猫は一目散に逃げた・・・と言っか
ヤシの上に乗っただけだが。

正直それは悔しかったな。

双子ではあるが、弟に負けた気がしてならない。

まあ、動物に好かれるかどうかなんて

俺としては別にどうでも良い事なのだが。

何か悔しい・・・。

2話・2（後書き）

注意

- ・特に記載のない場合、掲載されている小説はすべてフィクションであり、実在の人物・団体等とは一切関係ありません。
- ・特に記載のない場合、掲載されている小説の著作権は作者にあります（一部作品除く）
- ・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。

ご自由にリンク（紹介）してください。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。

目安にして下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138u/>

VS

2011年10月21日06時12分発行